陳後主文学の特徴　表現の美と声律の美

久保卓哉

陳後主の政治と文学については、正よりも負の評価の方が多いというのが普遍的な通念であるが、本稿では唐から明清までの文献資料をもとにその通念を覆すべく、正の評価が那辺にあるか、その根拠は那辺にあるかを明らかにした。

［キーワード］　七夕詩　聯句　四声八病　犯病　避病　陳後主　沈約　永明体

一　小説に描かれた陳後主

陳後主は六朝最後の天子で、またの名を「亡国の天子」と称され、その姿は、『大業拾遺記』が描写するなかに象徴的に表れている。

『大業拾遺記』唐・顔師古撰（魯迅校録『唐宋伝奇集』巻六、隋遺録巻上）

帝昏湎滋深、往往爲妖祟所惑。嘗遊呉公宅蓑臺、恍惚間與陳後主相遇、尚喚帝爲殿下。後主戴輕紗皀幘、青綽袖、長裾、緑錦純緣紫紋方平履。舞女數十許、羅侍左右。

隋煬帝の前に亡霊として現れる陳後主は、「薄絹の黒い頭巾をかぶり、青色のゆるやかな袖、長い裾の着物を着、履き物は、緑の錦、紫の紋をあしらったものをはいて、女性数十人をしたがえていた」と描写されている。ここには栄華と没落の悲哀を一身に背負った後主の姿がある。

二　正史が記述する陳後主

この姿は『陳書』と『南史』に伝わる史実をもとにしている。

『陳書』巻七、後主沈皇后伝、史臣魏徵曰

後主每引賓客對貴妃等遊宴、則使諸貴人及女學士與狎客共賦新詩、互相贈答、採其尤豔麗者以爲曲詞、被以新聲、選宮女有容色者以千百數、令習而哥之、分部迭進、持以相樂。其曲有玉樹後庭花、臨春樂等、大指所歸、皆美張貴妃、孔貴嬪之容色也。

『陳書』巻六、後主本紀、史臣魏徵曰

後主生深宮之中、長婦人之手、既屬邦國殄瘁、不知稼穡艱難。初懼阽危、屢有哀矜之詔、後稍安集、復扇淫侈之風。賓禮諸公、唯寄情於文酒、昵近羣小、皆委之以衡軸。謀謨所及、遂無骨鯁之臣、權要所在、莫匪侵漁之吏。政刑日紊、尸素盈朝、荒爲長夜之飲、嬖寵同豔妻之孽、危亡弗恤、上下相蒙、衆叛親離、臨機不寤、自投於井、冀以苟生、視其以此求全、抑亦民斯。

『陳書』巻七、後主張貴妃伝

及隋軍陷臺城、妃與後主俱入于井、隋軍出之、晉王廣命斬貴妃、牓於青溪中橋。

『南史』巻十、陳本紀下、後主

既見宥、隋文帝給賜甚厚、數得引見、班同三品。每預宴、恐致傷心、爲不奏吳音。後監守者奏言、叔寶云、既無秩位、每預朝集、願得一官號。隋文帝曰、叔寶全無心肝。監者又言、叔寶常耽醉、罕有醒時。隋文帝使節其酒、既而曰、任其性、不爾、何以過日。未幾、帝又問監者叔寶所嗜。對曰、嗜驢肉。問飲酒多少。對曰、與其子弟日飲一石。隋文帝大驚。

賓客、貴妃とともに遊宴しては、貴人、狎客と新詩を賦して歌い、婦人の手で育てられた後主は、隋軍の攻撃にあって井戸の中に逃げ込み、隋の文帝が「全く良心がない」人物だと言った、等のことが、後主の実像を伝える史実として記録されている。

三　陳後主の政治的評価

しかし、陳後主は政治的、文学的な評価が高いことも記憶しておかなければならない。

政治的な評価としては、初唐の朱敬則（六三五～七〇九）に「陳後主論」があり、亡国に至る内的要因と、隋による外的要因の分析が美文で著されている。正諫大夫でもあった朱敬則は「陳後主論」のほかに「魏武帝論」「宋武帝論」「梁武帝論」「北斉高祖論」「隋高祖論」等を著してそれぞれの国家興亡を論じているのだが、この「陳後主論」の中で、亡国の原因を次のように指摘している。

唐・朱敬則「陳後主論」（『文苑英華』巻七百五十三、興亡下）

禮義不舉、苛刻日滋。鄰好不敦、驕傲是務。嬖妾五十、盡有珥貂之容。麗服一千、咸取夭桃之色。加以貴妃夾

坐、狎客承筵。玉貌絳脣、咀嚼宮徵。花牋綵筆、吟詠烟霞。長夜不疲、略無醒日。

この指摘は史実にもとづいたもので、朱敬則は後主を否定的にとらえているのだが、しかし、負の評価ばかりではなく、正の評価をして次のように言っている。

長城公、器識古人、承平嗣主。觀其求忠讜之士、禁左道之人、淫祀妖書、鏤薄假物、即古明哲。何以加焉。

「太平のうちに帝位を陳の宣帝から継承した長城公（陳後主）は、器度見識に古人の風があり、彼が、忠誠正直の人士を求め、邪道の人や邪淫な祭祀を禁じ、邪説の書や金銀の装飾を禁じたのをみれば、彼は古えの明哲であることがわかる」これがその大体の意味だが、朱敬則が陳後主に対して用いた「古の明哲なり」という表現は、他の「魏武帝論」「宋武帝論」「梁武帝論」「北斉高祖論」「隋高祖論」等にも見られない表現で、陳後主を高く評価していると言える。この評価の根拠は、陳後主が即位した後の太建十四年三月癸亥（十九日）と四月庚子（二十七日）に発した詔にある。

『陳書』巻六、後主本紀

（太建十四年三月癸亥又詔曰）内外卿士文武衆司、若有智周政術、心練治體、救民俗之疾苦、辯禁網之疏密者、各進忠讜、無所隱諱。朕將虛己聽受、擇善而行、庶深鑒物情、匡我王度。

（同年夏四月庚子詔曰）應鏤金銀薄及庶物化生土木人彩花之屬、及布帛幅尺短狹輕疎者、並傷財廢業、尤成蠹患。又僧尼道士、挾邪左道、不依經律、民間淫祀祆書諸珍怪事、詳爲條制、並皆禁絶。

「内外の卿士、文武の衆司よ」と呼びかけて、政治を厳正にそして謙虚に行うことを宣言し、ひと月後には鏤金銀薄や民間の淫祀妖書を禁絶している。即位したとき陳後主は三十歳であったが、壮年天子の、天下を治めんとする気概に満ちた、熱き宣言だと言える。

三月癸亥の詔にある「民を救」うに「己れを虛」しくし、「物情」に通じて「我が王度」を正すことと、四月庚子の詔にある、奢侈淫祀を「禁絶」するという宣言は、古来天下を治める為政者が心がけてきたものであった。

『春秋左氏伝』昭公十二年

思我王度、式如玉、式如金。

『史記』巻三十二、斉太公世家

頃公弛苑囿、薄賦斂、振孤問疾、虛積聚以救民、民亦大説。

『漢書』巻七十二、貢禹伝

元帝初即位、徵禹爲諫大夫、數虛己問以政事。

『宋書』巻二十二、志第十二、楽四

明君篇

明君御四海、聽鑒盡物情。顧望有譴罰、竭忠身必榮。

『南斉書』巻三、武帝紀

臨崩又詔。凡諸遊費、宜從休息。自今遠近薦獻、務存節儉、不得出界營求、相高奢麗。金粟繒纊、弊民已多、珠玉玩好、傷工尤重、嚴加禁。不得有違准繩。

「我が王度」は『春秋左氏伝』昭公十二年に見え、「民を救う」は『史記』斉太公世家に見え、「己を虚しくす」は『漢書』貢禹伝が伝える漢の元帝の姿勢に見え、「物情」は『宋書』楽志が伝える楽府、明君篇に見え、そして「禁絶する」ことは、ここでは用例の体裁上『南斉書』を挙げたが、『後漢書』『宋書』にも見える。

朱敬則が「古の明哲なり」と評したのは、後主がこうした政（まつりごと）を為すことの本則を履行しようとしたからであろう。

同様の評価は朱敬則以外にもある。

闕名撰「散騎常侍贈太常卿陽翟侯褚公碑」（『全唐文』巻九百九十一、闕名三十二）

陳後主栖神雅什、纂歷鴻圖。景曖春坊雲　闕五字　子　闕三十字　命　闕二字　屬允膺嘉選。

唐の貞観二十一年（647）に八十八歳で没した褚亮を顕彰した碑文「散騎常侍贈太常卿陽翟侯褚公碑」に、陳後主は「もともと高雅な精神を持ち、即位して宏遠な帝業をくわだてた」と記している。この碑文で顕彰された褚亮は、十八歳の時に、徐陵とともに文章を論じて頭角を現し、それを聞いた東宮時代の陳後主に招かれて、そこで詠んだ詩が、満座の推奨を得たことで知られており、書家褚遂良の父に当たる。碑文の作者は不明だが、朱敬則と同じく初唐の人によって著されたものであろうと思われる。

四　陳後主の文学的評価　―唐―

以上は政治に対する評価だが、文学に対する評価には次のようなものがある。中唐の呂温（772-811）の「人文化成論」がそれである。

唐・呂温「人文化成論」（『唐呂和叔文集』巻第十一）

必以章句翰墨為人文、則陳後主隋煬帝。雍容綺靡、洋溢編簡。可曰文思安安、何滅亡之速也。

呂温は、柳宗元によって「天の英を窮め、古えの識を貫く」（柳宗元「祭呂衡州温文」）と称えられた英識の人である。この論で呂温は、『周易』賁卦彖伝の「人文を観て、以て天下を化成す」を理想として論を展開し、その「人文」を構成する柱の一つとして「章句翰墨」を挙げる。その「章句翰墨」の代表として陳後主と隋煬帝がいるというのである。これは、それなのに早く滅亡し

たという例の中で登場させているのだが、二人を「文思安安」という『尚書』堯典に見える堯の徳の高さをいう言葉で評価しながら、その「文思安安」というべき理由に「章句翰墨」（章句学と文学）と「洋溢たる編簡」（多くの文集）を挙げていることが注目される。

後主に文集が多いことは定評であったようで、唐の太宗は次の如く言う。

『貞観政要』巻七、文史第二十八

太宗謂曰、朕若制事出令、有益於人者、史則書之、足為不朽。若事不師古、亂政害物、雖有詞藻、終貽後代笑。非所須也。秖如梁武帝父子及陳後主隋煬帝、亦大有文集、而所為多不法、宗社皆須臾傾覆。凡人主惟在徳行。何必要事文章耶。竟不許。

これは、貞観十一年（六三七）に著作郎の鄧世隆が、「太宗の文章を編次して集を為さん」と表請したことがあったが、それを受けた太宗の言葉の中に見えるものである。太宗はこの時、結局、文よりも徳の方が大事だといって文集を編むことを許さなかったのだが、その理由として、短期間で滅亡した梁陳の天子の文集の多さを挙げている。注目されるのは、太宗が梁武帝、昭明太子とともに陳後主を挙げていることである。

そもそも帝王と文との関係は、堯舜に始まる。

『尚書』堯典

放勲欽明、文思安安、允恭克讓、光被四表、格于上下。

『尚書』舜典

濬哲文明、温恭允塞、玄徳升聞、乃命以位。

『論語』泰伯

子曰、大哉堯之為君也。巍巍乎、唯天為大、唯堯則之。蕩蕩乎、民無能名焉。巍巍乎、其有成功也。煥乎、其有文章。

帝堯を称揚した言葉に『尚書』堯典の「文思安安」があり、帝舜を称揚した言葉に『尚書』舜典の「濬哲文明」があり、孔子が「煥として其れ文章（文化の意）有り」と帝堯の偉大さをたたえて以来、後世の天子は文集を多く編むことによって有徳の証しとしてきた。それは『隋書』経籍志を見れば明らかである。

『隋書』巻三十五、経籍四、集、別集

漢武帝集一巻　梁二巻
魏武帝集二十六巻　梁三十巻
晉宣帝集五巻
宋武帝集十二巻　梁二十巻
齊文帝集一巻　殘缺　梁十一巻
梁武帝集二十六巻　梁三十二巻
梁昭明太子集二十巻
梁簡文帝集八十五巻

梁元帝集五十二卷
陳後主集三十九卷
煬帝集五十五卷

唐の太宗や呂温が言及した、諸天子や陳後主の文集の多さの背景にはこういうものがあったのである。

五　陳後主の文学的評価　――明清――

目を明代に移すと『漢魏六朝一百三名家集』を編んだ明の張溥が「陳後主集題詞」で陳後主の文学について論じている。

明・張溥「陳後主集題詞」（『漢魏六朝一百三名家集』）

史稱、後主標德儲宮、繼業允望、遵故典、弘六藝、金馬石渠、稽古雲集、梯山航海、朝貢歲至。辭雖誇、審其平日、固與鬱林東昏殊趨矣。

使後主生當太平、次爲諸王、步竟陵之文藻、賤臨川之黷貨、開館讀書、不失令譽。

漢武李夫人歌與落葉哀蟬曲、憂傷過於後代、而四夷服威。陳主詞非絶淫、亡且忽焉。哀而不起者、在聲音之間乎。非獨篇章已也。

張溥は、陳後主の文学は尊大で誇示するような所があるとはいえ、とかく同類と考えられがちな、齊の鬱林王と東昏侯の、常軌を逸した奢侈と非人間性とは違う。同列に扱ってはならない。そして、六朝末の混乱の世ではなく、太平の世に生まれていれば、陳後主は齊の竟陵王子良の文藻を歩み、開館読書してその令誉を失うことはなかったはずだと言っている。

また、漢の武帝の李夫人と陳後主の貴妃、張麗華とを比べて、武帝が李夫人を歌ったからといって亡国に至ったわけではなく、四夷はその威に服した。一方陳後主の場合は、四夷が威に服さずに亡国に至ったのだが、その文学は絶淫ではなく、亡国の原因は文学だけではない、と言う。この指摘はまことに正しい。

清代では『采菽堂古詩選』を編した陳祚明が陳後主の詩を論じている。

清・陳祚明評選『采菽堂古詩選』巻之二十九、陳一

○後主詩、才情飄逸、態度便妍。固是一時之雋。

○陳後主詩、如春花始開色鮮。故貴縱採取片蕚、亦自淹蔚。

○陳後主詩、如徐生爲容、顧步登降。事事修飾、望之嫣然。然未達禮意。

右の○印は、立命館大学所蔵の康熙四十五年序刊、刊本の体裁を模したものである。陳祚明は、後主の詩は、才気情趣に富み、あでやかであると言い、○印の第二では、春に花が開き始めて色鮮やかに映え渡っている様なもの。だからついその花びらを摘みた

くなり、おのずから蔚然たる美しさがあると言い、○印の三では、前漢の儒者で礼の容儀に通じた徐生を引きあいにして、後主の詩は、全てにおいて修辞が美しく、見た目が艶やか、しかし容儀の極意に達しているというほどではない、と言っている。陳祚明は非常に象徴的に、つまり、表現しがたいものを連想しやすいもの、ここでは春の花や容儀の美しさに置きかえて評している。

六　陳後主文学の特徴　―　七夕詩　―

その陳後主の文学はどういうものなのか。陳後主には、楽府三十五首、詩二十六首、賦、詔、勅などの文三十八篇が伝わっているが、ここでは詩を取りあげてその特徴を明らかにしてみよう。

後主の詩は文学史的にみると、「賦韻」「賦得」の詩が多いことは、つとに故斯波六郎、鈴木修次に指摘があるのだが（斯波六郎「『賦得』の意味について」『中国文学報』第三冊、一九五五年十月　鈴木修次「六朝・唐代の和韻詩の変遷」『未名』第三号、一九八三年一月）、これに付け加えるなら、「七夕詩」が六朝を通じて最も多いのが陳後主であるということである。陳後主には、七首の七夕の詩がある。

陳後主七夕詩

1　七夕宴宣猷堂各賦一韻詠五物自足為十并牛女一首五韻物次第用得帳屏風案唾壺履

2　七夕宴重詠牛女各為五韻

3　同管記陸琛七夕五韻

4　同管記陸瑜七夕四韻

5　七夕宴樂脩殿各賦六韻

6　七夕宴玄圃各賦五韻

7　初伏七夕已覚微涼既引應徐且命燕趙清風朗月以望七襄之駕置酒陳樂各賦四韻之篇

では、六朝を通じてどのような七夕の詩があるのか。逯欽立『先秦漢魏晉南北朝詩』を典拠にしてその主な詩人の詩の題を抽出したのが次である。

六朝七夕詩

魏　文帝　燕歌行

西晋　陸機　擬迢迢牽牛星

潘尼　擬明月皎夜光

東晋　王鑒　七月七日侍皇太子宴玄圃園

宋　顔延之　七夕觀織女

謝霊運　為織女贈牽牛

孝武帝　七夕詠牛女

沈約　七夕

斉　范雲　織女贈牽牛

梁　武帝　望織女

東飛伯労歌

劉孝威	七夕穿針	
	詠織女	
	苦暑	
簡文帝	七夕	
	七夕穿針	
庾肩吾	奉使江州舟中七夕	
	七夕	
北魏	魏收	七月七日登舜山
北斉	邢邵	七夕
	盧詢祖	中婦織流黄
北周	庾信	七夕
		楊柳歌
		閨怨
陳	江總	七夕
		内殿賦新詩
	張正見	秋河曙耿耿

この中では魏文帝の「燕歌行」のごとく、詩題ではなく詩句の中に「牽牛、織女」など、七夕に関する事を詠みこんだものはすべて対象としている。これを見れば、六朝では、陳後主の七首が際立って多い。では、唐ではどうかと、今や電子文献で容易に検索することができる全唐詩を調べてみても、陳後主の七首が最も多い。

これは陳後主の特異性を示すうちの一つだが、その理由は、単純に言えば、他の時代の天子よりも頻繁に七夕の宴を開いたということであろう。宴には酒と歌舞と賓客がつきもので、いかにも六朝末を象徴するできごとである。

陳後主の七夕詩の特徴は、詩の題を見ても分かるように、四韻、五韻、六韻というように韻数に制限があり、また、右の陳後主七夕詩の1「七夕に宣猷堂に宴し、各おの一韻にて五物を詠じ、自ずから足りて十（韻）と為し、并せて牛女一首五韻を賦す。物の次第は、用て帳、屏風、案、唾壺、履とするを得」のように、帳や屏風などの物と、物を詠む順序とを予め決めておくというところに特徴がある。

七　陳後主文学の特徴　―　表現の美　―

これら七夕詩のうち、陳後主の詩の特徴がよく表れているものに「七夕に玄圃に宴して各おの五韻を賦す」がある。

七夕宴玄圃各賦五韻（『古詩紀』巻一百八、陳第一、後主、詩）

座有顧野王、陸琢、姚察等四人上

殿深炎氣少　殿は深くして　炎氣　少なく
日落夜風清。　日は落ちて　夜風　清らかなり　（平声庚韻）
月小看針暗　月　小さくして　針を看るに暗きに
雲開見縷明。　雲　開きて　縷を見るほどに明るし（平声庚韻）
絲調聽魚出　絲の調べありて　聽きし魚出で
吹響間蟬聲。　吹の響きありて　間りて蟬聲をなす（平声庚韻）

度更銀燭盡　更度りて　銀燭尽き
陶暑玉卮盈。　陶暑のために　玉卮に盈たす　（平声庚韻）
星津雖可望　星津は　望む可きと雖も
詎得似人情。　詎ぞ人の情に似せるを得んや　（平声庚韻）

詩意

宮殿は奥深くて、暑気はさほどでもなく、日が沈むと、夜風が涼しい。
月あかりは小さくて針に糸を通すには薄暗いが、ちょうど雲がわれて色の糸が見えるほどに明るくなった。
琴の調べを聞いて魚が水草の下から出てき、笛の音に雑じって蝉が鳴いている。
時が経って灯燭が消え、暑さを消すために杯に冷たい酒をみたす。
夜空を見上げると天の川は目に見ることができるが、一年に一度しか会えない織女星はどうしてこの世の人の心と同じでありえようか。

この詩は第三、第四の二句と第五、第六の二句の表現が特に見事である。「看針」「見縷」と針と糸とを詠むのは、七月七日の夜に女性が七本の針に美しい色どりの糸を通す「乞巧奠」の行事を歌ったもので、梁・宗懐の『荊楚歳時記』がその行事を伝えているが、陳後主の宮廷でも、玄圃園の庭園に出て、月に針をかざしながら糸を通したのであろう。宮女が白い手に針と糸とをもって月明かりの下で糸を通す。月が雲に隠れて暗くなると「通らないわ」と声をあげ、月が現れると「通ったわ」と声をあげ、それを見守る陳後主や座客はどっと沸いて月を見上げ、雲のゆくえに一喜一憂したのであろう。この二句には月と雲の動きにつれて明暗が交互におとずれる光の動きがあり、その光の下で針を持つ白い手があげる透き通った声の響きがある。月と雲、針と糸、明と暗、という、平易で簡潔な用語の対比だが、まことに動的で立体感がある。

第五、第六の句では魚と蝉が歌われているが、魚の動きを詠んだ詩で人口に膾炙されるのは謝朓の「魚戯れて新しき荷動き、鳥散ちて餘れる花落つ」（「遊東田」『文選』巻第二十二）で、また梁の簡文帝にも「游魚池の葉を動かし、舞う鶴階の塵を散らす」（「擬落日窗中坐」『玉台新詠』巻七）があり、いずれも漢の楽府「江南」から出たものだが、特に謝朓の詩は、小刻みに揺れる荷の葉から水ぬるむ春の水面下の魚の動きを知るという、自然の息吹をとらえた見事なものである。後主の詩はこの流れの中にあるのだが、後主の詩には、人間と融和する自然がある。弦の音に誘われて魚が顔を出し、笛の音に合わせて蝉が鳴く。七夕の夜に、庭園のすべてが宴に参加している。ここが謝朓詩とは違う。清・陳祚明も「月小の二句は雋なり」「絲調の二句は細なり」（『采菽堂古詩選』巻之二十九）とこの詩の精細さを指摘している。

『古詩紀』はこの詩の題に付記して「座に顧野王、陸琢、姚察等四人有りて上る」と伝えている。この詩の題について考え

てみると、座にいたのは実名が伝わる三人と、もう一人の合計四人で、「各おの」とはこの四人と陳後主であろう。「五韻を賦す」とは、陳後主の詩を見れば分かるように五つの韻をふむ十句の詩を作るということで、その韻字は、後主の場合「清、明、聲、盈、情」だから、その韻目は平声「庚」であった。その「庚」の韻目に属する字を使って五韻十句の詩を、それぞれが作ったのだから、四人の詩も「庚」韻に属する他の韻字、例えば、「精、營、貞、成、呈、正、頃、嬰、京、兵、兄、生……」等の韻字を用いて作詩したのであろう。四人の詩も残っていなければならないはずだが、残念ながら残っていない。恐らくは陳後主の詩ほど優れたものではなかったからであろう。

八　陳後主文学の特徴　――　声律の美　―

詩を作る上では、押韻のほかに声律を重視するものだが、それを沈約の「四声八体」、後に隋の王通以来「四声八病」と言われる声律論のうち、「平頭、上尾、蜂腰、鶴膝」の四病と、興膳宏論文「従四声八病到四声二元化」（『中華文史論叢』47　一九九一年）が、沈約が既に二四不同の原則を遵守していたと指摘する二四不同を加えて、後主の七夕の詩を検証すると次のようになる。

沈約の声律論からみた陳後主七夕宴玄圃各賦五韻

殿深炎氣少　　去平平去上
日落夜風清。　　入入去平平
月小看針暗　　入上去平去
雲開見縷明。　　平平去上平◆
絲調聽魚出　　×△平平平入◆
吹響間蟬聲。　　×平上去平平
度更銀燭盡　　去平平入上
陶暑玉巵盈。　　平上入平平
星津雖可望　　平平平上去
詎得似人情。　　上入上平平

蜂腰犯病　◆印
二四不同犯病　△印
平頭犯病　×印

陳後主七夕宴玄圃各賦五韻				
	避病	犯病		
平頭	92.3%	7.7%		
1・6	36／39	3／39	去・入	○
2・7			平・入	○
11・16			入・平	○
12・17			上・平	○
21・26			平・平	犯病
22・27			平・上	○
31・36			去・平	○
32・37			平・上	○
41・46			平・上	○
42・47			平・入	○

			鶴膝										蜂腰					上尾
35・45	25・35	15・25	5・15	47・50	42・45	37・40	32・35	27・30	22・25	17・20	12・15	7・10	2・5	45・50	35・40	25・30	15・20	5・10
上・去	入・上	去・入	上・去	入・平	平・去	上・平	平・上	上・平	平・入	平・平	上・去	入・平	平・上	去・平	上・平	入・平	去・平	上・平
○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	犯病	○	○	○	○	○	○	○	○

									二四不同
47・49	42・44	37・39	32・34	27・29	22・24	17・19	12・14	7・9	2・4
入・平	平・上	上・平	平・入	上・平	平・平	平・上	上・平	入・平	平・去
○	○	○	○	○	犯病	○	○	○	○

右の表の平頭1・6、2・7、11・16、上尾の5・10、15・20、25・30とある数字は、後主の詩五言十句、全五十字の中で第何字に当たるかを示し、最後の二四不同47・49まで、併せて三十九項目について検証している。四声の平上去入は『廣韻』に依る。平上去入の確定は、古い先行論文でも、最近の先行論文でも誤認が見られるため慎重に照合したが、これによって検証すると、後主は、三十九項目のうち三項目で病を犯しただけで、声律論上の病を注意深く避けていることが分かる。

八―二　永明体の声律との比較

この避病率92.3%がどれくらいのものなのか。それを「四声八病」の声律論を唱えた沈約や、謝朓、王融等永明詩人と比較すると次のようになる。比較の対象として、陳後主の七夕詩と同様に、沈約、謝朓、王融、王僧孺等の複数の詩人が韻の制約のもとに作詩した聯句「阻雪連句遙贈和」を取り上げる。

阻雪連句遙贈和（逯欽立『先秦漢魏晋南北朝詩』斉詩、巻四、謝朓）

謝朓

積雪皓陰池○　×入入上平平▲　（平声支韻）　平頭犯病　×印
北風鳴細枝○　×◆入平平去平▲◆　（平声支韻）　上尾・蜂腰犯病　▲・◆印
九逵密如繡　△上平入平△去　二四不同犯病　△印
何異遠別離○　平去上入平　（平声支韻）

江秀才革

風庭舞流霰　×平平上平△去　平頭・二四不同犯病　×・△印
冰沼結文澌○　×平上入平平　（平声支韻）
飲春雖以燠　上平平上入　平頭犯病×印
欽賢紛若馳○　×◆平平入平◆　（平声支韻）　蜂腰犯病　◆印

王丞融

珠霙條間響　平平△平△上　二四不同犯病　△印
玉溜檐下垂○　入去平上平　（平声支韻）
杯酒不相接　平上入平入

寸心良共知○　去平平去平◆　（平声支韻）　蜂腰犯病　◆印

王蘭陵僧孺

飛雲亂無緒　平平×△去平△上　平頭・二四不同犯病　×・△印
結冰明曲池○　×◆入平平入平◆　（平声支韻）　蜂腰犯病　◆印
雖乖促席讌　平平入入去
白首信勿虧○　入上去入平　（平声支韻）

謝洗馬昊

飄素瑩簷溜　×◆平去平平去◆　平頭・蜂腰犯病　×・◆印
巖結噎通岐○　×平入入平平　（平声支韻）
罇罍如未澣　平平平去上
況乃限音儀○　去上上平平　（平声支韻）

劉中書繪

原隰望徙倚　×平入去上去　平頭犯病　×印
松筠竟不移○　×◆平平去入平◆　（平声支韻）　蜂腰犯病　◆印
隱憂恧萱樹　×△上平入平去　平頭・二四不同犯病　×・△印
忘懷待山巵○　×◆去平上平平◆　（平声支韻）　蜂腰・二四不同犯病◆・△印

沈右率約

初昕逸翮舉　平平入入上
日昃駑馬疲○　入入平上平　（平声支韻）
幽山有桂樹　平平上去去

歳暮方参差○　去去平平平　（平声支韻）

これを集計したものが次の表である。

	避病率 %	犯病率 %	避病数	犯病数
全体	80.0	20.0	84/105	21/105
謝朓	73.3	26.7	11/15	4/15
江革	73.3	26.7	11/15	4/15
王融	86.7	13.3	13/15	2/15
王僧孺	80.0	20.0	12/15	3/15
謝昊	86.7	13.3	13/15	2/15
劉繪	60.0	40.0	9/15	6/15
沈約	100.0	0.0	15/15	0/15

集計表を見ると、沈約が100％避病し、謝朓は73.3％、王融は86.7％避病し、劉繪はわずか60％しか避病していないという結果が出て、この中では沈約の100％が突出している。だが各詩人の避病率の差がどうかということより、表の第一列目に示した聯句全体の避病率80％という数値が注目される。これは「永明体」の避病率を表していると考えられるからである。何故ならば、沈約は常に100％避病したのではないことは既に高木正一「六朝における律詩の形成」（『日本中国学会報』第四、一九五二年）や、清水凱夫「沈約声律論考」（『学林』第六号、一九八五年）が指摘しているし、また今回の方法で私が調査した別の詩「同沈右率諸公賦鼓吹曲名先成為次」では、沈約は87.1％の避病率、謝朓83.9％、王融64.5％、「同前再賦」では、沈約80.6％、謝朓87.1％、王融74.2％であったことからもそれは言える。

このような避病率は陳後主についても同様で、声律の法則を遵守する確率は作品によってそれぞれ異なるのだが、この「七夕宴玄圃各賦五韻詩」では、非常に注意深く声律の美しさを追求していることが分かる。

九　まとめ

以上、陳後主の政治と文学に対する後世の評価と、陳後主の文学の特徴について述べてきたが、「陳後主は六朝末にあってもなお六朝の宮廷文学を追求する」そういう天子であったと言えよう。

（付記）拙稿は、第五十一回中国四国地区中国学会（於愛媛大学、二〇

〇五年五月二十八日）の口頭発表「陳後主の文学 ― その評価を中心に ―」を基に文章化したものである。口頭発表は、拙稿「陳後主文学の評価 唐・朱敬則『陳後主論』、呂温『人文化成論』から『漢魏六朝一百三家集』、『采菽堂古詩選』まで 」（『福山大学人間文化学部紀要』第4巻、二〇〇四年四月）、「陳後主の鉤韻と沈約の賦韻及び陳後主の逸詩『宣猷堂宴集五言』」（『中國中世文學研究』小尾郊一博士追悼特集、第4546合併号、二〇〇四年十月）及び「陳後主の七夕詩と六朝の侍宴七夕詩」（『福山大学人間文化学部紀要』第5巻、二〇〇五年四月）の三篇と、声律に関する考察を新しく加えて行った。会場で御高見を賜った先生方に御礼申し上げる。

The Feature of the Literature of *Chen Hou Zhu* : With Special Reference to the beauty of the Expression and the Meter

Takuya KUBO

It is the conventional wisdom that there are more negative evaluation than positive evaluation, for the Politics and Literature of *Chen Hou Zhu.* But in this paper, to turn the conventional wisdom upside down, I clarify where is a positive evaluation and a foundation based on document from *Tang* to *Qing*.

Keywords: Poetry of Star Festival, *Yong Ming* style 永明体, Four tones and eight illness 四声八病, *Shen Yue* 沈約, *Chen Hou Zhu* 陳後主